

高島平 GREEN TALK & CONNECT 公式レポート

#3

2026年1月

1. 概要

今回のGREEN TALKは「高島GREEN TALK & CONNECT」とし、地域・行政・企業・大学など多様な主体が一堂に会し、緑地の未来像や活用アイデアを共有・発信することを目的として実施しました。当日は、参加者同士が活動内容や想いを共有する「ピッチセッション（CONNECT）」と、地域のキーパーソンを迎えたトーク企画「GREEN TALK」の二部構成で実施しました。



2. 当日のトーク概要

ピッチセッション（CONNECT／かたる場）

3つのグループに分かれ、それぞれの活動紹介や緑地活用のアイデアが発表されました。

第1部：行政・街づくり

登壇：高島平まちづくり推進課、みどりと公園課

既存の緑地管理の枠を超えた新しい取り組みを提案しました。

- ・「たかまちみどり」の活動紹介

緑豊かながら十分に活用されていない現状を踏まえ、雑草や草花の写真を撮影してパネル化する取り組みや、花冠づくりなどのワークショップを通じて、緑に親しむきっかけをつくる活動が紹介されました。

- ・植物図鑑アプリ構想

緑地内の植物を「ポケモン図鑑」のように集めるスマートフォンアプリを構想中であることが共有されました。子どもたちが遊び感覚で植物に親しむことができる仕組みとして、現在検討が進められています。

- ・廃材の活用

解体予定の旧高島第七小学校の廃材（体育館の壁材など）を再利用し、DIYでベンチやオブジェを制作、緑地に設置するアイデアが提案されました。



第2部：大学・民間企業

登壇：淑徳大学（永井ゼミ）、株式会社大和田組

大学や企業による、学びや交流の場としての緑地活用についての提案が行われました。

・淑徳大学（永井ゼミ）
観光経営学科の学生より、緑地を単なる学習の場ではなく、「アウトプットの場」として活用したいとの提案がありました。過去の農業体験（青森県・宮崎県）を踏まえ、つながりを持って行う農作業体験や、学生が主体となってイベントの企画・運営に関わっていききたいという意欲が示されました。

・学生からのアイデア
「緑が意外と少ない」という視点から、ブルーベリーなど実のなる低木を植えることや、高校生も巻き込んだ世代横断型のイベントを実施したいという提案がありました。

・株式会社大和田組
2月開催予定の「板橋市場プチマルシェ」の告知とあわせて、緑地にキッチンカーや滞在できるスペースを整えば、近隣の病院を利用する方や、庭を持たない団地住民にとっての「居場所」になるのではないかという指摘がありました。



第3部：地域活動団体・プレイヤー

登壇：あそびの根っこ、地域交流広場ぱうぜ、音楽でつながる板橋の会－I T A O N

地域で活動する多様な団体・個人から、具体的なコンテンツ提案がありました。

- ・遊びの場（プレーパーク）
子どもが自発的に遊べる環境づくりを通じ、コミュニティ形成や防災力（レジリエンス）向上につながる活動を紹介。DJイベントや写真のシルクスクリーンなど、アートとの融合事例も共有されました。
- ・七輪防災
日常的に七輪を使用することで、災害時の炊き出しや暖房に備える「七輪防災」の提案され、公園での火気使用には課題があるものの社会実験として挑戦したいという意向が示されました。
- ・音楽とコミュニティ（いたおん）
登録者660名以上の音楽グループとして、緑地での音楽フェスや食・お笑いと組み合わせたイベント開催への意欲が語られました。
- ・フードロス削減の取り組み
青森のりんご農家と連携し、廃棄予定のりんごを活用したアップルパイ販売など、食を通じた社会課題解決の事例が紹介されました。



3. GREEN TALK #3 (トークセッション)

ゲスト：増野 健一 氏 (高島平一丁目町会 会計部長)

地域で新たな動きを生み出しているキーパーソンの増野さんをお迎えし、町会活動の変化や高島平緑地の可能性について対話が行われました。

・町会活動のアップデート

増野氏は、子どもの頃に参加した盆踊りなどの原体験を通じて、地域の活動が身近な存在として感じられていたことから町会活動にも自然に関わり、自ら進んで取り組んできた経緯を紹介しました。

従来の活動に加えて「高一マルシェ」を立ち上げ、町会費を納めている地域事業者にもメリットを還元しつつ、外部団体の参加を両立させることで、「町会役員の負担を抑えながら継続できる仕組み」を構築してきたことが語られました。

・高島平緑地のポテンシャル

かつては「寒々しい場所」という印象を持っていた高島平緑地について、今回の社会実験を通じて、「地域でイベントを行うのにちょうど良い広場」であり、駅前広場のような可能性を持つ空間であるとの評価が示されました。

・多世代交流と寛容な空気

町会には70～80代の方から若い世代までが所属しており、世代間をつなぐ存在がいることで、「やってみればいい」という新しい挑戦を受け入れる寛容な空気が生まれていることが共有されました。



3. 今後の進め方

以下のような方向性が示されました。

- ・防災を絡めての火気使用や音出しなど、緑地利用における安全面やルールづくりの検討
- ・子ども、若者、地域団体など、多様な主体が関われる仕組みづくり
- ・音楽、防災、食、自然体験など、分野を横断した取り組みの可能性
- ・行政、地域、外部団体が役割を分担しながら進める連携体制の整理

今後の社会実験の中で一つずつ検証し、つなげていくことが期待されます。

4. 総括

今回の社会実験を通じて、人が集い語り合うことで新たな可能性が生まれる場であることが確認されました。

行政・大学・企業・地域住民が立場を越えて参加したピッチセッション (CONNECT) は、それぞれの活動や思いを知るきっかけとなり、新たなつながりや次の行動につながる場として大きな効果がありました。CONNECTのようなピッチセッションを継続的に実施することで、人と人、活動と活動のつながりを広げ、緑地の活用や価値を段階的に高めていきたいと考えます。